大賞 ［大学生の部］

言語能力だけでなく、「壁に立ち向かっていく姿勢」の習得のために、「周学」という新しい留学システムを提案。その発想の独自性、具体化のイメージが検討されている点が高く評価されました。

国際社会で活躍するための近道——「周学」システム

早稲田大学　政治経済学部3年
宇多 将太郎　うだ　しょうたろう

1. 問題意識と背景

私の大学生活も早くも半分以上が過ぎ去り、3度目の夏休みに入っている。就職活動を目前としている私は、専ら「グローバル」や「TOEIC 700点以上」などという言葉を聞くようになった。これは、日本経済の低迷や、少子化に伴う人材不足の懸念により、世界への発信力や他の文化や価値観を受容する姿勢が若者に求められていることが背景にある。私の周りでも「内向き志向」とは差をつけるべく、多くの友人が1学期間の留学に挑んでいった。しかし、正直なところ私は現代の留学システムに疑問を覚える。その学習は非効率であり、最善の手段ではないと感じるのだ。

私は父の仕事の都合で幼児期をエジプト、小学校の間をアメリカで過ごした。中学以降は日本に住んでいるが、大学では、男子チアリーディングチームで副代表を務め、初のアメリカ遠征を企画し、その実行を指揮監督した。また、海外旅行が趣味であり、英会話教室のアルバイトで得た資金で、この2年半で10か国を訪れた。このような経験を通じ海外への挑戦という姿勢やリーダーシップについて学び、大きく成長した自信がある。今回、私はどんどん進むグローバル化に対応すべき海外留学はどうあるべきか、それに適した新たなシステムを考えていきたい。

2.現在の留学の実態

2-1　制度

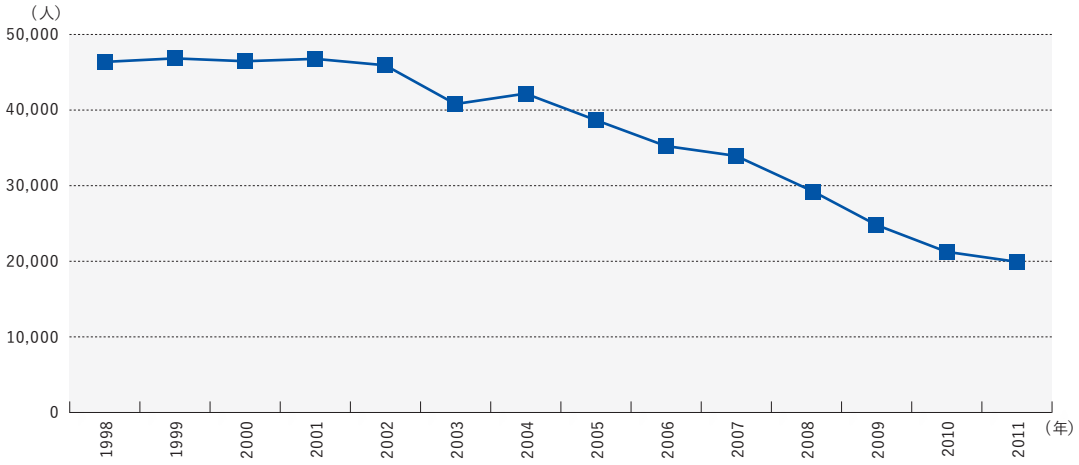
日本の大学における一般的な留学制度では、留学の期間は6か月から1年以内で、多くの場合協定校に所属する。多くの学生はアメリカ・カナダ・イギリスなど英語圏の大学に留学している。また、現地では所属大学の寮で暮らすか、ホームステイさせてもらうことが多い。肝心の勉強面に関しては現地学生と同じ授業にはついていけないため、まず英語の授業を集中的に行う留学生用のプログラムに参加する。それにかかる費用は、奨学金の援助等が無い場合、国や条件で幅はあるが、英語圏の大学の学費は非常に高く、1年の学費及び生活費の総額でおよそ300万～500万円になってしまう。

2-2　留学の動機・実態

そんな費用を払ってまで学生が留学に行きたいと感じる動機とは何だろうか。大学で聞きまわったところ、やはり英語を習得したいというのが第一にあった。また、他国の文化や生活を知りたい、自分を鍛えたい、そして単純に外国で暮らしてみたいなどといった動機も見られた。

このような現状について、私は歯がゆさを感じる。海外の大学で勉強したということにはなるが、大半の勉強内容は英語であって、専門的なことはあまり勉強出来ない。また、その英語プログラムは留学生向けである故、どうしても留学生同士で固まってしまう。私は以前から留学している友人の写真をインターネットで見る度に、一緒に写っているのがアジア人ばかりであることに疑問を抱いて

図1　米国の大学等に在籍する日本人学生数



資料：Institute of International Education「Open Doors」

いた。また、1年あるいはそれ以下という短い期間で習得出来る英語力は限られており、帰国後は英語を使える場面がなかなか無いため、その英語力も低下していくばかりである。もちろん海外で生活し、大学に通うことによって人間として学べることは大きいだろう。しかし、第一の動機である英語力の向上に関する限り、年間300万～500万円という大金を払って得られる成果は小さすぎる。

実際に、留学に出向く日本人学生は近年減少している（図1参照）。この原因には、不景気の影響もあり、さらに企業が社員を海外の大学に派遣するようなケースもデータとして含まれているため、一概に日本人学生のやる気がなくなっているとは断定出来ない。しかし、少なくとも現在の留学の在り方が制度・経済的に魅力的で無いとは言えるだろう。

3. 本当に求められるもの

では海外留学の成果として、どんなことを期待すべきなのか。我々若者に実際に求められるのは高度な英語力ではなく、言語バリアや他文化を恐れない、積極的な姿勢であると考える。英語圏の国においては外国人に対して完璧な英語力は求めていない。そして英語圏外では当然ながら相手が流暢に英語を喋れないこともある。このような状況下で高度な英語力は持っているに越したことはないが、その言語能力だけでは生きていけない。それよりも重要となるのは、自信を持って壁に立ち向かっていく姿勢である。英語能力が人並みでも自分の思いを伝えようとする強い意志があれば、単語を並べるだけでも相手はしっかり受け止めてくれるし、分かろうともしてくれる。逆に、英語力があってもそれほどの強い思いがなければ自分の思うように物事は進められないだろう。この姿勢さえ身につけることが出来れば、世界観がどんどん広がっていくことにワクワク感を覚え、さらなる原動力に繋がっていく。また、その行動や効果が周りの人にも波及し、新たな動きの発端になるのである。遠慮しすぎるあまりに萎縮してしまいがちな日本人にとっては、この姿勢の習得は大きな課題である。

私は大学に入ってから自分がそれまでほとんど知らなかった国々を周り、この「壁に立ち向かっていく姿勢」を身につけることが出来た。あまり英語が通じないロシアで身振り手振りを交えながら現地の人に道を聞き、宿泊先に辿り着くことが出来た。また、インドでは夜行列車で同じ部屋になった老夫婦と英単語を並べ合い、お互いの国の文化について語った。話し言葉では意思疎通が図れないという環境でも、諦めずに挑めば意外にうまくいくということを学んだ。また、未知の国でそのように解決策を見出すことを経験したことによって世界がより小さく、近いものに感じた。私自身はもっと世界を知ることに対す

るワクワク感を覚え、この、ワクワク感を与えてくれる旅というものの価値がもっと広く知られ、認められるべきだと考える。

4. 周学システムのすすめ

4-1　制度・内容

ここで私は、海外での勉強経験の新たな手段として「周学」システムを提案する。これは今までの一般的な留学と同じ1年以内の期間で、世界中の大学を渡るものである。学生は各大学に1か月前後滞在し、現地の言語や文化、歴史について学ぶ。これに対して「ただの旅行ではないか」という意見があがるかもしれない。しかし、この周学制度においては下記の如く大学ならではの重要なプログラムが組み込まれており、非常に革新的なのだ。

周学プログラムは大学のネットワークで成り立ち、大学側が期間に応じていくつかのコースを決め、提供する。コースの具体例としては「6か月でアジアを周るコース」や「1年で全大陸を周るコース」など。学生はこの中で予算や時間に応じて自分に適したコースを選択し、周学に出発する。

協定校は1か月単位で学生を受け入れ、寮の部屋を提供する。授業では、現地の文化・言語・歴史に関する導入的なカリキュラムを備え、その国の社会問題のフィールドワークなどの課外活動も行う。これらは周学生専用のものとなるが、現地学生との交流も図るため、通常の授業や課外活動も可能な限り体験可能とする。このプログラムにより学生は世界の国々の現実や実態を目の当たりにし、他国の文化を理解し、その国が抱える社会問題への強い関心を持つ。また、他国を知っていくことにより、日本のこともより深く理解することが可能となる。周学カリキュラムの内容はすべて初歩的なものとし、学生の外国への好奇心を掻き立てることを目的とする。

最初からというのは無理だが、周学プログラムが認知され拡大してくれれば、各国での日系企業訪問もカリキュラムに組み込みたい。これは、その国で事業を展開している日系企業の支店や工場を訪問し、その仕事内容や業務・生活環境を学ぶものである。現地のビジネスマンとの交流により、仕事のやりがいや、海外及びその国で働くことの困難なども直接聞くことが出来る。このプログラムにより、学生は他国の文化のみならず、海外で働くということの実態を見聞きして自分の将来設計にも役立たせることが出来る。日系企業訪問は大学の協力ならではのプログラムであり、学生にはもちろん有意義で、大学としても企業と一歩踏み込んだ関係が築ける。また、企業側にとっても学生へのアピールになり、他企業との差を見せつける良い機会にもなり得るため、学生、大学、企業の三者間でWin-Win-Win関係が出来上がる。

4-2　効果

以上のようなプログラムにより、学生は1年間の周学を通して多くの国々の文化や社会的背景を学ぶことが出来る。学生はそこで得た知識を活かし将来設計を行い、どんどん海外へ羽ばたいていくだろう。さらに、このプログラムは大学側にとってもプラスに働くのである。企業との良好な関係に加え、協定校ともより強い関係を築くことが出来る。私の将来的構想としては、周学の全世界への拡大により、ネットワークの各大学が学生を周学プログラムに送り込み、大学側は常に送り込みと受け入れを行うようになる。大学の負担はどうしても増えてしまうものの、各大学のキャンパス内でも国際化が進む。周学に参加していない学生も海外への意識が高くなり、周学の影響はどんどん波及していく。

4-3　問題点・対策法

一方で、周学プログラムにおいていくつかの懸念もあるため、その対策法に言及したい。

第一に挙げられるのが、費用である。1か月単位で国々を移動するため、どうしても移動費はかさんでしまう。残りを占める主な費用は生活費や学費である。生活費に関しては現地大学の寮での滞在になるため費用は高くない。アメリカでの2食付の寮での生活費は1か月10万円程度と日本とさほど変わらない。そしてより物価が安い国へと移動すると、当然生活費も安く済ますことが出来る。大きな課題なのが学費である。現在は基本的に1年単位でしか学費が定まっていないが、周学の導入に伴い、各大学で1か月単位の学費を設定する。また、ここで周学の利点が見られる。アメリカ・イギリス・オーストラリアなどといった英語圏の大学は日本と比べても学費が高い。しかし、1か月だけ通うとなるとその費用は1か月分のみに抑えられ、他に学費が安い国にも滞在するため、相対的に費用の負担は小さくなる。これに加え、学生への教科書の貸し出しなどの節約制度も導入することによって費用をさらに安く収めることが出来る。そして全世界的規模で周学が認識されると、スポンサーの企業や国からの補助金なども見込め、大学側にとってより効率的に運営する環境が整う。私の試算では出だしは従来の留学と同程度であるが、規模が大きくなるに伴い大学の運営が制度化され、必要な額は減っていくと予想される。いずれにせよ、これまでの留学システムより高い効用が期待されるため、同額もしくはそれ以下という条件は十分と言える。

第二に、安全面での懸念だ。大学に所属するとはいえ、毎月移動が行われるため、現地で他の学生と強い交友関係を築くことは困難である。そうなると拠り所も限られ、安全についてのアドバイスを受けることや、非常時に助けてもらうことが出来ないリスクがある。この対策として、周学プログラムでは、各大学に専属のコーディネーターを設置し、常に

監視の目があるようにする。また、現地大学の学生との交流が図れるシステムを設置することで、周学プログラムの学生から積極的に話し相手を得ることが可能となる。私が通っている大学にも国際コミュニティセンターという学部生と留学生との交流を図った機関がある。その中には誰でも立ち寄れるラウンジが設置されており、定期的に外国の文化を紹介するイベントも開催している。このように気軽に交流が行われる機関を各大学に設置することで、周学プログラムの学生により多くの情報が行き届くだろう。

5. まとめ

日本人は欧米への憧れを強く持っている一方、英語が喋れないことなどによるコンプレックスで、外国人との接触に抵抗があるという矛盾した状態の中にある。しかし、就職活動でもよく聞くように、間違いなくグローバル化に伴う外向きへのニーズは大きい。私はこの「周学」という、学生が旅行感覚で好奇心を満たし、国際競争力をつけられるプログラムの普及により、日本全体が活気づくと考える。まさに、自分のワクワクを満たすことで力がつき、さらにそのワクワクが学生・大学・企業と国内外に広がってゆき、社会的変革という形になるプログラムなのである。

参考文献

・「Nippon 甦れ　私の処方箋」
　読売新聞　2013年8月13日朝刊
・Institute of International Education「Open Doors」
・「大学留学特集」
　日本経済新聞　2013年8月23日朝刊